

あの森での出来事

奄美市立屋仁小学校 五年 弓場 蒼大

「行ってきませう。」

まさるは、赤い屋根の家から飛び出した。早く早く、とげんかんでせかしているのは、友達のようにすけだ。よすけは、夏休みの間だけ奄美に遊びに来ている都会の子だけど、二人は大の仲良しだった。今日は朝から、集落のそばにある森を二人で探検しようだ。

森の中に入ると、まさるは目につく物を一つ一つしよいかいした。てんぐのうちわのようなアマミテンナンシヨウや、大きなクワズイモの葉っぱ。枝が入り組んだガジュマルとたくさんのリュウキュウアサギマダラ。よすけがめずらしがってくれるたびに、まるでガイドになった気分だった。しかし、そうして歩いていくうちに、二人は自分たちの後ろに道がないことに気づいた。

「やばい。迷ったかもしれない。」

「えっ、どうするの。」

こんなところで迷ったら、帰れる自信はない。まさるはあせった。すると、目の前に一羽の鳥が飛んできた。真っ赤な鳥だ。

「わあ、赤いくちばし。きれいな鳥だね。」

「アカシヨウビンだよ。おれの大好きな鳥。神様の使いだつて言われてるんだ。」

とまさるがしようかいすると、なんと、そのアカシヨウビンは二人に話しかけてきた。

「ヨウコソ、ボクラノ森へ。」

「わっ、しゃべった。」

「あの、ここからどうやったら出られるかな。」

「コノ森ヲキレイニスレバイイヨ。森ハトテモ美シイケレド、最近ハ観光客ガヤツテキテゴミヲ捨テテイッテシマウンダ。」

と教えてくれた。よすけは、まるで自分のことを言われたように、小さく首をすくめた。

「少シ先ニ、ゴミガタマツテキタナイトコロガアルカラ、ソコ行コウ。」

アカシヨウビンに案内されて、森のおくまでたどり着いた。するととつぜん、

「アブナイ。」

とアカシヨウビンがさげんだ。びっくりして上を見ると、二人よりも一回り小さな、赤いかみの男の子がいきなり飛びかかってきた。

「おい。お前ら何してんだ。」

「えっ、ぼくらは森から出るために、今からこの森をきれいにするんだよ。」

「それはこまるな。せつかくきたんだから一しよに遊ばうぜ。じゃあまず、おれとゴミ集めの競争をしよう。おれの方が多く集めたら森からは出してやらないよ。」

「ええっ。」

おどろいているうちに、男の子がものすごいスピードでゴミを集め出したので、二人はあわててゴミを拾い始めた。スーパールのレジ袋、お菓子のくず、空きかん。みるみるうちに、同じくらしいのゴミが積み上がっていた。「あっ、あれで最後じゃないか。」

だいぶきれいになったところで、まさるはおくの木の下にペットボトルを指さした。

「ぼくが拾ってくるよ。」

ようすけがかげだした。けれど、森になれていないようすけは、すぐに木の根っこにつまづいてたおれてしまった。

「あいたたた。」

ようすけの横をすりぬけるようにして、男の子が大きくジャンプした。

「はははっ、勝負はおれの勝ちだな。」

その時だった。アカシヨウビンがす早く飛びこんできて、くちばしでゴミを拾い上げた。すると、深くしげつた木々の間からものすごい光が差しこんできて、まさる

とようすけは固く目を閉じた。そして気がつくど、二人はまさるの家の、赤い屋根の上にこしかけていた。

「あれっ。」

二人は、顔を見合わせた。おたがいの顔は夕焼けに照らされていて、もう一日が終わろうとしていた。夢なんかじゃない。何より、ようすけの手には、よごれたペットボトルがにぎられていた。

「あのさ。」

ペットボトルを見つめながら、ようすけは小さな声で言った。

「これ、この間ぼくが捨てたものかもしれない。お母さんとナイトツアーに出かけた時飲んでいたの落としなんだ。もちろんわざとじゃなかったけど。」

「そっか。」

まさるは笑って、ようすけのせ中をたたいた。

「拾えて良かったじゃん。おれ、さっきの男の子、ケンムンじゃないかと思うんだよ。奄美の森に住んでいる妖怪。ケンムンとアカシヨウビンに感謝しなくっちゃな。」

ぐすつと鼻をならしたようすけも、てれくさそうに笑った。

「今度会ったら、一しよに遊ばなきゃね。」

キュロロロ、とアカシヨウビンの鳴き声が遠くでいつ

まぶも聞こえていた。